

NEWS LETTER

No.53 February 2024

Aichi Shukutoku University IGWS

ジェンダーから、
ダイバーシティへ

愛知淑徳大学 ジェンダー・女性学研究所

ジェンダーレス制服、
本当に作っちゃいました！



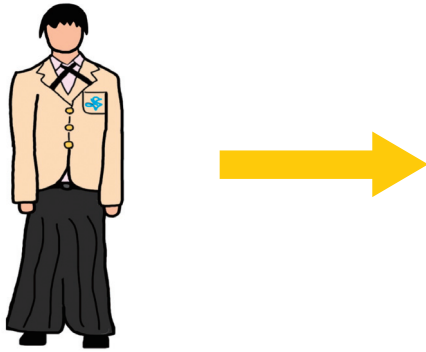
特集 ジェンダーレス制服完成

「ジェンダーレス制服プロジェクト」はステレオリムーブ課の2022年度から始まった一大プロジェクトです。

近年、制服のジェンダーレス化が進んでいますが、ジェンダーレス制服のデザインを考えた組織はあっても実際にジェンダーレス制服を制作している組織は多くありません。そこで、我々ステレオリムーブ課は誰でも共通して着用することのできるジェンダーレス制服の制作に向けて動き出しました。

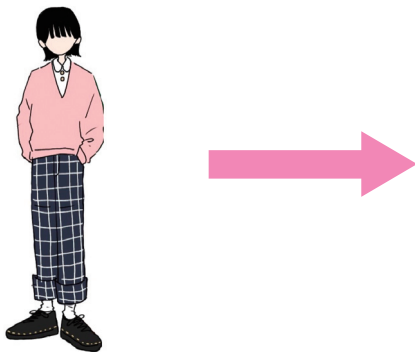
今回は、52号の特集企画で行ったアンケートで人気の高かった3デザインの制服を実際に制作しました。

デザイン1「学校らしさ×品格×差別化」



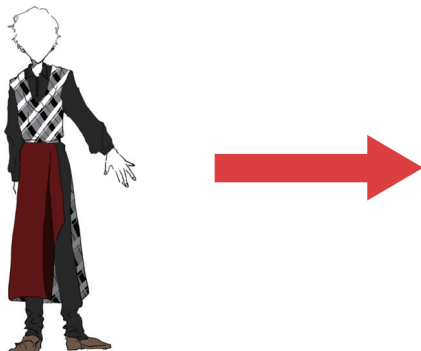
制服らしいシルエットを保ちつつも、明るい色を取り入れることで固すぎない雰囲気演出しています。
また、幅の広いズボンを採用することで夏でも通気性がよく、一年中動きやすい制服です。

デザイン2「動きやすさ×着心地×遊び」



丸みを帯びた襟や、ピンク色の優しい雰囲気のベストによって、カジュアルさと学生らしさを両立しています。
また、わかりやすいチェック柄で裾の折り込みをデザインに取り入れたズボンが他の制服とは違った雰囲気を醸し出しています。

デザイン3「従来の制服との差別化」



チェック柄のベストとズボンの周りを取り巻く腰巻スカートが従来の制服とは異なる雰囲気を演出しています。
ベストと腰巻スカートの表の生地と裏地には、どちらも同じ生地が使われていて統一感を生み出しています。学生たちが手作りした自信作です！



これらの3デザインの制服は、2023年度の淑楓祭（学園祭）の教室展示企画にて、ステレオリムーブ課が発足してからこれまでに至る活動の紹介や資料と共に展示させていただきました。教室にあるモニターでは、デザイン1の制服を着用して大学生活を送っている私たちが撮影した動画を流していて、制服を着て動くリアルな姿を見ることができると非常に好評でした。この動画は、愛知淑徳大学の公式YouTubeチャンネルに投稿されているので、ぜひご覧ください。

こちらのQRコードからも動画にアクセスできます！



2023年度から、長久手キャンパス6号棟2階に「だれでもトイレ」が新設されました。また、2024年度から、ジェンダー女性学研究所が「ダイバーシティ共生センター」へとリニューアルします。そこで、だれでもトイレ誕生の経緯やダイバーシティについて、本学の島田修三学長にお話を伺いました！



Q. だれでもトイレを作った理由はなぜ？

多様な方が過ごしやすい大学づくりを学校がサポートするのは当然のことで、多目的トイレと同じように、だれでもトイレも必要だったとおっしゃっていました。実は学内には男女兼用のパウダールームもあるのだとか！学長のダイバーシティに対する強い思いが感じられます。今後は、だれでもトイレを増設しなければならないとおっしゃっていました。

Q. ダイバーシティ共生センターへのリニューアルのきっかけは？

社会は人それぞれの「違い」をどう見るかの転換期にあるため、これからはジェンダー以外の「違い」も対象とした組織になってほしいと考え、リニューアルに至ったそうです。活動の幅は広く、学生を巻き込んだオープンな組織にしたいとのこと。私たちSR課も担い手として頑張らないと！とやる気が出ました。

Q. 改めて、本学の理念である「違いを共に生きる」の意義とは？

理念を決めた1995年当時も今も変わらず、この理念は「生きやすい社会」のためにあるそうです。持続可能な開発目標（SDGs）が制定される前からこの思いを持たれており驚きました。時代を先取りされていますね！「他者と距離を取って、自分とは区別された別の存在と考えすぎてしまうと、それが差別につながっていきます。だから、壁を取り払って同じ人間として考えることが大事なんです。」という言葉がとても印象に残りました。



Q. 私たち学生に求めることは？

「知性」を持ってもらいたいそうです。なぜなら、知識を増やした分だけ視野が広がり、相手をもっと深く理解できるようになるからです。相互理解は誰もが「生きやすい」社会の創造にも通じているため、「我々は自分たち皆が生きやすい社会を作るために勉強するんじゃないかな。」とおっしゃっていました。学長のこの一言が心に残っています。



今回の取材では、私たちが通う大学の理念や思いに関して深く知り、より大学への愛着を持つことができました。

島田修三学長、取材へのご協力をいただき、ありがとうございました。（安藤 彩友美）

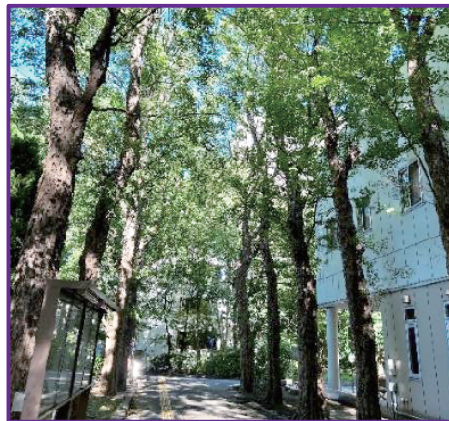
2024年度から、ジェンダー女性学研究所はダイバーシティ共生センターへとリニューアルし、11号棟1階へと移設します！
皆さん、ダイバーシティ共生センターにぜひ来てくださいね！！

ゆるりと巡るジェンダー研

第4回 お茶の水女子大学 ジェンダー研究所 (IGS)

<ジェンダー研究所 (IGS) とは>

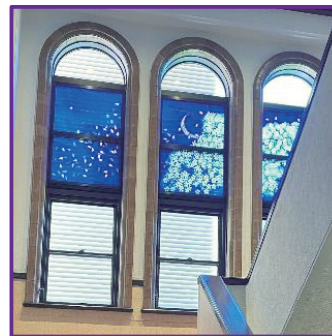
1975年、お茶の水女子大学に日本の大学で初の女性に関する資料を収集する専門的資料館として女性文化資料館が設立されました。1986年には女性文化研究センターへと改められ、1996年には外国人客員教授の招へい制度設立と共に、国際的なジェンダー研究を目指すジェンダー研究センターとなりました。そして、お茶の水女子大学が創立140周年を迎えた2015年、国際的なジェンダー研究を目指すだけでなく、グローバル女性リーダー育成研究機構に所属する研究所の1つとして大学のミッションであるグローバル女性リーダー育成機能強化に取り組むジェンダー研究所 (IGS) になりました。



<自然と歴史が共生するお茶の水女子大学>

お茶の水女子大学に入ると、歴史のある建物と新しい建物が入り混じって建っており、歴史の長さや豊かな学習環境を整え続けている新しさの両方が感じ取れました。また、キャンパス内には小さな花や植木から大きな木まで様々な種類の植物がありあらゆる場所に植えられており、建物の外を歩いていて植物の見えない場所はないほどでした。左の写真にも写っているような建物と同じ高さを誇る植物も広い通路や広場によく植えられており、長い年月をかけて成長した数多くの植物がお茶の水女子大学の歴史の深さを想像させるようで特に印象に残っています。これらの植物は日陰を作ることによって快適な環境を作りだしているだけでなく、緑豊かな自然に囲まれることで心落ち着く大学生活を送ることが出来るように感じました。

その他にもお茶の水女子大学には、印象深い所がたくさんありました。右下の写真に写っている2種類のステンドグラスは、大学講堂である徽音堂にある2つの階段の踊り場のそれぞれ取り付けられたものです。それぞれのステンドグラスには異なる時間帯の桜の木が描かれています。月を背景に流れていく桜の花びらや、広く咲き誇る桜の木がとても美しく、大学の敷地内にいながらも美術館で芸術作品を眺めている時のような気分になっています。図書館に入ろうとすると、ふと入口のそばでくつろいでいる猫が目に入りました。猫たちは、大学にすみ着いていて、お茶猫と呼ばれて有志の学校関係者がお世話しているそうです。ずっと見ていたくなる可愛さでした。



<1975年から収集し続けた膨大な図書>

お茶の水女子大学付属図書館には、1975年の女性文化資料館設立以来から収集し続けた文献を保管するための特設書架が置かれています。右下の写真は、その特設書架の様子を写したものです。写真をよく見ると、左手に並ぶ本棚の上にジェンダー研究所と書かれた札が取り付けられています。これらはジェンダー研究所が所蔵する資料を保管するための本棚で、この写真に写っている通路の奥まで並んでいます。ここには、25000冊の図書と300種の雑誌が保管されているそうです。

その中には平塚らいてうが編集長を務めた婦人月刊誌『青鞥』の複製版や、全国の子校の同窓会名簿や学校史があり、本学の歴史をまとめた『学園創立者小林清作先生：創立七十五周年記念』も所蔵されていました。他にも、歴史を感じさせる雑誌や、全国の大学から収集した書籍も所蔵されており、長年にわたる収集の歴史が見て取れるようでした。軽く書架を見て回っただけでも面白そうな本がたくさん見つかると、古い文献も多く所蔵しているためジェンダーについての歴史を紐解く際にも力を貸してくれるだろうと思わせる書架でした。



<IGSに突撃！>

IGSでは、主に海外からの研究者の招へいなどの国際的な交流を行い、ジェンダーの国際的研究拠点として活動を社会に還元するために定期的にセミナーや国際シンポジウムを開催しています。国際的に権威のあるジェンダー研究者の講演をこれほど企画している施設は他にはないでしょう。また、国内外を問わず論文を募集して、学術雑誌『ジェンダー研究』を年に一回刊行しています。2021年に刊行された24号には、本学のジェンダー・女性学研究所を支えてくださっている助教の反橋一憲先生の論文も投稿論文として掲載されています。今回の取材では、所長の戸谷陽子先生と、アカデミック・アシスタントの花岡奈央さんにIGSの活動についてお話を聞きました。



<世界と繋がるIGS>

IGSではジェンダー研究の国際的研究拠点として学際的で国際的な研究プロジェクトが行われていました。その一つにノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターとの共同研究があります。ノルウェーといえば世界経済フォーラムが発表している「ジェンダー・ギャップ指数(GGI)」で、2022年に世界3位となった国です。このGGIで日本は116位と先進国では最低レベルの結果となりました。そのようなノルウェーと日本の国際比較研究は非常に興味深いですね。またタイのアジア工科大学院大学と大学院生対象の交換研修プログラムを組むなど若手研究者の育成にも取り組んでいるようです。

<問われる「女子教育」>

お茶の水女子大学は2020年度からトランスジェンダー学生を受け入れています。この受け入れの決定は当時の副学長(現学長)が主導して行ったものだそうです。そしてその決定後、学内の様子では受け入れそのものに否定的な意見はみられなかったとのこと。大学はこの決定を「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する」というミッションに基づいたものと説明しています。このミッションに基づきお茶の水女子大が公表したガイドラインは、名前や性別の情報から学生生活、その後の就職活動といった幅広い領域に及んでいます。その内容からは対話を重ね学生と共に一歩ずつ歩いていく大学の真摯な姿勢を感じました。この決定を皮切りに他の女子大でも同様の受け入れが開始されています。今回の取材の中で「抑圧された女性」に居場所や教育の場を提供し女性のウェルネスに貢献する女子大の役割が話されましたが、この受け入れはその「女性」とは誰を指すのかが問われていることを示しているのではないのでしょうか。



<ステレオリムーブ課の感想>

昔から受け継がれている強い意志と、研究に対する熱意に圧倒されました。取材メモを見返しても再び新たな発見があるほど有意義な話をさせていただけてとても楽しい時間でした。ジェンダー研究のために私たちに何ができるのか考え続けたいです。IGSの皆様、取材にお付き合いただき、ありがとうございました。(安藤 彩友美、佐村 有基、羽生 勇太)

お茶の水女子大学 ジェンダー研究所

所長：戸谷 陽子

所在地：東京都文京区大塚2-1-1

人間文化創成科学研究科棟401号

お茶の水女子大学ジェンダー研究所

妊娠・出産について考える座談会

産婦人科医である高尾美穂先生との対談の準備として、今年度加入した新メンバーを中心に、妊娠・出産について考える座談会（意見交換会）を開催しました！

これを機にあなたも一度、自身やパートナーの妊娠・出産や、その後について考えてみてくださいね。

〈現在、高齢出産や男性の育休取得などに世間の関心が向けられていますが、あなた自身、妊娠・出産に対してどのような考えやステレオタイプを持っていますか？〉

交流文化学部・2年

- 結婚をして、子どもを持つのが幸せなのではないか（中学生くらいまでそう思っていた）
- 専業主婦になっても幸せなくらい自分にとってかけがえのないパートナーを見つけることが女性のミッションなのかなあ…

心理学部・1年

- 性役割について感じるような時が大学入学まではあまりなかった
ただ、結婚という概念に触れたときに結婚するという選択肢はなかった
- 子どもは好きだけど、それまでの結婚→性行為という前段階のハードルが高い

心理学部・1年

- 妊娠・出産などの、パートナー間の密な関係について考えたことがなかった
- 今考えてみてもすぐに答えが出ず、分からない

人間情報学部・4年

- 人生経験として妊娠・出産を体験してみたいが、実際に子どもを産み育てられる自信はない
- 子をなさない選択をしたとき、老後の人生の目標がなくなりそうで怖いという思いがある

交流文化学部・2年

- 女性の人生経験として、妊娠・出産は良いものなのだろうか？
- 自分が幸せになる体験として興味はあるが、育児を選んで幸せになる未来はあまり見えない…
- 女性の方が仕事と育児の両立が大変そうに思える（これも固定観念だなあ）

心理学部・1年

- 興味という点では、行動を伴うようなものではなくて、学問的な意味で興味がある
実際に自分で…といったことはムリ！

以降話は続く…

4人での座談会でも、上記のように様々な観点から、様々な思考・感情が出てきました。上記のようなステレオタイプを持っていることを自覚し、ステレオタイプが植え付けられた背景・社会的な風潮を掴み、それが自身にもたらす影響について鑑み、正しい情報や必要な情報を取捨選択していくべきだと感じました。

今回は生物学的に身体に備わる性と切っても切り離せない『妊娠・出産』について焦点を当ててみました。紙面の都合上本誌には載せられなかった意見や考え、妊娠・出産からさらに先を考えた話もできたため、良い経験となりました。

新メンバーのお三方、ご参加ありがとうございました！これから研究所を引っ張って行ってください！（桑江 愛瑠）

職業を選ぶ



違いを共に生きるための福祉と展望

福祉貢献学部 福祉貢献学科 社会福祉専攻 2年 河瀬 郁哉さん

高校生のとき、サッカー部のマネージャーとして選手の身体だけでなく精神面での援助も行ってた。選手に対するこのような援助は、自分の力を発揮できるのでやりがいを感じるものだった。そういった経験もあり、人への心的援助や社会復帰の支援といったものに興味を持ち、福祉を学ぼうと考えた。大学入学後、ボランティアや実習で様々な体験をするようになり、その中で「かかわり」というものを考えるようになった。「かかわり」は人間が社会の中で生きるのに必須のもので、暮らしやすい社会を作るために大切なものだと思う。では、その「かかわり」は、なぜ大切なのだろうか。

私は大学の実習等を通じて障害を持つ方と接する機会が増えた。そして様々な経験をしていくうちに、私は「障害」でなく、「その人」を知ろうとすることの重要性を感じるようになった。障害をもっている人も障害の有無以外は私と同じなのだ。そもそも、今は健常者と呼ばれている人もいずれはそう呼ばれなくなる。つまり、福祉は障害者だけを対象としたものではないと言える。そのため、「障害」に沿ってではなく、その人はどんなことが苦手で、どんなことを必要としているのかといったことを「その人」と共に考え、その上で共に生きるためにはバリアフリーなどの環境も含めどうすべきかを考えることが大切だ。昨今は「かかわり」の重要性が蔑ろになっていると感じる。自分は一人で生きている、誰かの助けなしに生きていけると意識・無意識的に思っている人が多いと思う。このような社会にどうアプローチしていくかをこれから勉強や様々な経験から考えていきたい。

(取材：佐村 有基)



CAを目指す過程で得た挑戦と希望

交流文化学部 交流文化学科 国際交流・観光専攻 3年 浅井 祐里実さん

CAを目指し始めたのは、誕生日祝いの旅行でロンドンに行ったとき、客室乗務員の方の美しい挙措、体調不良になった方への惜しみない援助と真剣なまなざしを見て、私もこんな美しい女性になりたいと思ったのがきっかけだ。コロナの影響もあり、CA業界では地方創生に力を入れた取り組みが展開されていた。そんな現状に合わせて、地方創生・地域活性化にも貢献できる大学を探して愛知淑徳大学への進学を希望した。

CAの仕事ではお客様が本当に求めていることは何か、お客様の態度や状態を観察して適切なアプローチをする必要がある。私自身、様々な人を知るために色々なことに挑戦してきた。ゼミの活動の一環として度々直接、地域に訪れ、そこに住む方々が大切にされていることや望んでいることを伺い、自分にできないことがないか試行錯誤してきた。学部の内外で語学力の向上に努める中で様々な文化に触れ、日本の伝統を感じた。また、オーケストラ団体にも参加し、指揮者と演奏者間で行われるコミュニケーションの多様性を実感した。一人ひとりの強みや弱みを見抜き、強化し合ったり補い合ったりするチームワーク力を鍛えることができた。

コミュニケーション能力は、多様なお客様との間だけでなく、CAの仲間との間でもとても役に立つと思う。仲間に対し先回りした行動ができることで飛行機全体の安全性を確保することができるだろうと考えている。円滑かつ正確な情報伝達が行われることにより、お客様も安心することができるだろう。

私にとって違いを共に生きるとは一人ひとりがお互いの個性を尊重し合い、発信し合える環境作りをすることだと思う。私は今まで得てきた経験をこれからの希望として、そのような環境作りに徹したい。

(取材：岩島 仁登)

2023年度のステレオリズム課の活動

2023年度は取材や訪問の機会に恵まれ、成果の多い1年でした！そんな私たちの1年間の活動をご紹介します。



<6月>

- ・3人の新メンバーも加えて、顔合わせミーティング
- ・愛知工業大学名電高等学校訪問
- ・四日市市立富洲原中学校の皆さんが来訪

<7月>

- ・小牧市役所訪問・小牧市長と対談

<8月>

- ・後援会誌「楓信」からの取材依頼

<9月>

- ・お茶の水女子大学ジェンダー研究所取材



研究所のSNSアカウントでも活動を紹介しています！

右のQRコードから、ぜひ見てみてください！



<10月>

- ・大学祭(淑楓祭)での展示企画開催

<11月>

- ・名古屋西高校の皆さんが取材のために来訪

<12月>

- ・誰でもトイレやダイバーシティについて、学長への取材と意見交流

1年を通して、ジェンダーに関する様々な課題や取り組みについて知ることができました。これから先も好奇心を持って活動に取り組み続けたいです！

(岩島 仁登)



Cinema / Book Discovery



『作りたい女と食べたい女』

ゆづきさかおみ著 2021年～(既刊4巻) マンガ

社会にはびこる「幸せな女性像」に悩まされながら、料理を通して絆を深めていく野本さんと春日さん。いつしか野本さんは、自身がレズビアンだと気づきます。お互いを思いやりながら、日常のモヤモヤに丁寧に向き合っていく空気感が推薦者のお気に入り。幸せに生きる2人の姿に心が温くなる物語です。

(安藤 彩友美)



『彼女が好きなものは』

草野翔吾監督 2021年 映画

BL好きな紗枝(山田杏奈)とゲイである純(神尾楓珠)の恋愛映画です。好きなものは好きであり、他人からどう思われても関係ない、でも“普通の人”のように過ごしたいと思ってしまう。高校生の2人が、自分や自身を取り巻く社会と葛藤し成長する姿をご覧ください。

(夕部 蓮太)



『独り舞』

李琴峰著 2018年 小説

亡くなった同級生への初恋に囚われながら、レズビアンである疎外感を持つ主人公・迎梅。台湾と日本で異なる言語を使いながら生きていく中で、死や自身のアイデンティティについて考える。彼女が抱える生きづらさの一端に触れた時、私たちは何を考えたらいいのか。独りで舞い続けるしかないのか。考えさせられる作品です。

(石塚 江莉奈)

エッセイ

「ダイバーシティ」とサラダボウル



初年次教育部門 助教 鈴木 崇夫

2024年4月、「ジェンダー・女性学研究所」が名称新たに「ダイバーシティ共生センター」に生まれ変わることになりました。これまで初年次教育部門で「違いを共に生きる・ライフデザイン」(基幹科目)をコーディネートしてきた私も、この度新センターのメンバーとして加わることとなりました。みなさんどうぞよろしくお願いいたします。

■ 愛知淑徳大学理念「違いを共に生きる」

さて、本学の理念である「違いを共に生きる」は、ダイバーシティとその大部分が重なっていると思いますが、みなさんは「違いを共に生きる」や「ダイバーシティ」と聞くとどんなイメージを持つでしょうか。私は「違いを共に生きる」を初めて見たとき、サラダボウルと重なるイメージを抱いたのを覚えています。彩り豊かで水々しいサラダボウルを現実社会と重ねて考えてみるとどうでしょうか。

■ ジェンダーからダイバーシティへ

ジェンダー・女性学研究所は、ダイバーシティ(多様性)の中の「ジェンダー」が研究の中心的対象です。一方で、私は同じダイバーシティの中でも「多文化共生」(とりわけ、地域日本語教育)を専門に研究や社会活動をしています。「多文化共生」という言葉は、かなり市民権を得てきた言葉ですが、起源は1995年1月に起きた阪神大震災だったと言われています。みなさんは多文化共生社会と聞くとどんな社会をイメージするでしょうか。

外国人住民比率が愛知県内6位で、約6%(市民16人に1人が外国人)と高い西海市が2020年に行った日本人市民アンケート(回答数1,051件)では、多文化共生という言葉について、「聞いたことがあり、意味も知っている(34.5%)」「聞いたことはあるが、意味は知らなかった(24.4%)」「聞いたことがない(40.1%)」「無回答(1.0%)」という結果となりました。よく見聞きするようになったとはいえ、意味まで理解している地域住民はまだ少数ということが言えそうです。総務省(2016)によれば、多文化共生とは、「国籍や民族の異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共にいきっていくこと」とされています。総務省の定義を字面だけで読むと、たしかにそれがいい!と思えるでしょう。しかしながら、このような日本社会になるには課題が山積で、実現には3つの壁があるとされています。「言葉の壁」「心の壁」「制度(法律)の壁」です。

私の研究分野である地域日本語教育では、「言葉の壁」を取り除くということを中心に据えて、「心の壁」や

「制度(法律)の壁」も取り除き、地域社会の多文化共生を実現していこうと常に考えています。「言葉の壁」を取り除くと言うと、外国人住民の日本語学習を支援して日本語ができるようになってもらえば解決すると想像するかもしれませんが、実はそれだけでは「言葉の壁」を取り除くことはできません。言うまでもありませんが、「心の壁」も取り除くことができません。多文化共生社会に向かうには、地域で包摂する側の日本人が意識を変えていかなければならないのです。言い換えれば、外国人住民の日本語学習機会の確保と並行して、分野を問わず全ての日本人の日本語(使用)も変わらなければならないということです。近年では、それを「やさしい日本語」と呼んで社会への普及が進められています。本学には医療や教育に関連する専攻が多いですが、「生きる」に関わる現場に従事する時にはとりわけ重要だといえます。

■ 少子高齢化社会から人口減少社会へ——「多文化共生」待たなし

厚生労働省が2023年6月2日に発表した2022年の人口動態統計(概数)において、「合計特殊出生率」は1.26で過去最低でした。生まれた赤ちゃんの数は77万747人で初の80万人割れになり、その一方で死亡数は156万8,961人と過去最多で、人口の自然減は79万8,214人で16年連続減でした(中日新聞朝刊 2023年6月3日)。つまり、日本は既に現在の人口を維持することが出来なくなっています。国立社会保障・人口問題研究所が2023年4月に公表した将来推計人口では、総人口は、2020年の1億2,615万人から2070年には3割減少して8,700万人となり、そのうち外国人が1割を占めるとしています。2022年の日本の外国人住民比率が2.4%ということを見ると、現在の約4倍となる計算です。既に人手不足を埋めるため、外国人材の受け入れと活用は増加の一途ですが、今後はそれがますます膨らんでいくと見通すことができます。

近い未来の日本では、生活者としての外国人が地域にいるのは今よりもっと当たり前の景色になり、その時には「多文化共生」は待たなしを通り越していると思います。そんな未来の社会を主力として担うのは現在大学生のみなさんです。本学の理念「違いを共に生きる」は、10年先、20年先を見越した理念です。多様性が生きる社会をイメージしながら、楽しく語り合える場、それが新しくできる「ダイバーシティ共生センター」だと思います。みなさんぜひセンターに足を運んで、想いを声にしにきてください。新センターでお待ちしています。

エッセイ

選択と決断—多様な生き方を目指して



ビジネス学部 助教 菅野 淑

女って面倒だな。こう感じたのは、筆者の研究調査地、西アフリカ・セネガルでフィールドワークをしている時だ。20代前半から何度も単身セネガルに中・長期滞在し、調査をおこなってきた。筆者の調査対象は、セネガルの「伝統」でありながら、現代的な展開が著しいサバルと呼ばれる太鼓とダンスに携わる人びとだ。その太鼓を演奏するのは、グリオと呼ばれる職業音楽家の家系であり、なおかつ男性に限定される。そのため、調査をしていて関わるのは男性が多い。調査するとすると、ひとりその中に入っていかなければならない。そこで筆者が女であることが面倒になる。

何が面倒なのか。それは、調査対象の人びとから筆者が恋愛対象として見られるということだ。これは本当に恋愛なのか、それとも日本へ渡航する足掛かりとするためなのか。おそらく、日本に行きたいという思いの方が強いだろう。セネガルのみならず他のアフリカ諸国にも当てはまるのだが、貧困を抜け出し、より豊かな生活、仕事を求めヨーロッパなどを目指す人びとがあつと絶たない。そのような中で、外国人と結婚するという事は、海外移住のチャンスと見なされるのだ。

こちらは調査として聞きたいことがあるから、グリオに会いに行く。しかし、相手は国外に出られるチャンスを生み出そうと、口説いてくるからまともに話ができない。帰国後の話のネタとしては非常に面白いが、その現場にいると面倒で仕方がない。もし自分が男だったら、同性同士、もっとスムーズに話を聞きだすことができるのではないかと幾度となく思った。彼らの名誉のため断っておくが、全てのグリオが口説いてくるわけではないし、男性でも別の方法で日本に招聘してほしいと懇願されることがある。

こうした恋愛関係やその先にある結婚は、日本でもセネガルでも盛り上がるトピックだ。特に結婚に関しては、どちらの国でも人びとの大きな関心事となる。妙齢の人に対して、「結婚しないの?」と聞くのはどこでも同じだ。筆者も例外ではなく、20代前半から知るセネガル人家族に30代半ばで再会した時には、「あなたもう結婚しないと!」と言われた。それでいて、「結婚相手にグリオは止めておきなさい」と口を出してくる(廃止されてもセネガル社会に根強く残る身分制度のため)。日本でも同様、散々結婚について聞くわりに、その相手は誰でもいいわけではない。面倒なものだ。結婚すれば、親族から急かされることも、調査中に口説かれたり、人生を心配されたりするこ

とが減ることは分かっている。

20代後半、大学院で学びを深めている時期に、日本の友人らは続々結婚、出産。30歳を過ぎると、既婚の友人の中には家を建てたという話も耳にするようになる。セネガルでも年下の子たちが次々に結婚、出産。一方筆者は、20代は研究することを何よりも優先していたし、30代の一時期、学術世界から離れていた時も、その決断に至ることはなかった。

人生は選択の連続だ。特に女性は、年齢やキャリアを重ねていく間に取捨選択する機会が増える。2023年ノーベル経済学賞を受賞したアメリカの経済学者クラウディア・ゴールドディンは、その著書の中で「キャリアを犠牲にするのは、歴史的に見ても、そして今日でさえも、ほとんどの場合が女性」と述べる。そして「男性は家族を持ちながら、キャリアアップすることができる。それは、女性が家族のよりよい幸せのために時間を提供しようと、キャリアを置き去りにするからだ」と続ける[ゴールドディン 2023:18]。

結婚したために自分の望んだキャリアを捨てる、または一時中断せざるを得ない可能性。筆者が20代から30代後半まで結婚という決断に至らなかった理由はそれだ。もちろん、家庭に入り、夫や家族を支えるということが喜びという人も大勢いる。しかし、そう考えない人も一定数存在する。キャリアアップを望む中で、男性であればプラスに繋がることも、女性にとってはマイナスになるかもしれないのが結婚だ。セネガルの一部の男性をみても、海外移住のきっかけとして先進国の女性との結婚を試みる。紙面の都合上、詳細は割愛するが、セネガル人女性の場合その傾向は低い。幸せの象徴として語られがちな結婚も、時によっては人を悩ませるものとなる。

自分にとって何が幸せなのか、どの選択が最良なのかは人それぞれであり、その決断は誰に強制されるものではない。筆者の友人も、既婚子持ち/子なし、性的マイノリティ、独身、離婚…それぞれが選択または状況を受け入れ生きている。今や、かつてほど肩身の狭い思いをせずに、多様な生き方を選択できる時代になった。それでも、周囲の声に押し潰されそうになる時がある。しかし、自分の人生を生きるのは自分自身だ。その選択と決断は尊重されるべきものだろう。

引用文献:クラウディア・ゴールドディン『なぜ男女の賃金に格差があるのか—女性の生き方の経済学』2023(2021)年 慶応義塾大学出版会

ジェンダー・女性学研究所 第42回定例セミナー

「価値創造につながるダイバーシティ&インクルージョン」

12月15日(金)3限：星が丘キャンパス

本年度の定例セミナーは、大日本印刷(DNP)の根本和子様をお招きし、企業におけるダイバーシティ&インクルージョン推進の取り組みについてお話いただきました。DNPでは社長自らがメッセージを発信し、ダイバーシティ&インクルージョンを推進されているそうです。誰もが多様性を構成する一員であり、そして、ただ存在するだけでなく、個人として尊重されて認められる。このようなダイバーシティ&インクルージョンの推進こそが、企業として新たな価値を生み出し、イノベーションに繋がるというお話は、企業に限らず、学術の分野はもとより、広く社会一般に当てはまるものだと思えて感じました。

男女雇用機会均等法が制定されて40年近くになりますが、DNPでも上位職に占める女性の割合が依然として高まっていないことが課題となっているそうです。社内の最も多いマイノリティは女性であり、インクルージョンの鍵は女性であるというお話は、ジェンダー平等への取り組みを一段と加速させていく必要があると感じました。ダイバーシティという言葉も2000年代から20年近く使われてきたにもかかわらず、社会の状況があ

講師 根本 和子氏(大日本印刷株式会社)

まり変化してきてない点も、改めて我々が乗り越えるべき課題の大きさを実感しました。

ダイバーシティ&インクルージョンの実現に向けた道のりは長く、これからの社会を担う学生が果たす役割は非常に大きいと言えます。今回の定例セミナーをきっかけに、学生にもダイバーシティ&インクルージョンについて学んでほしいと願います。参加した学生の中には、企業の方のお話を初めて聞く学生もいたようですので、学生がダイバーシティについて学べる機会を多く提供できるよう、新センターでも取り組んでまいります。



2023年度 研究所の1年

2023年度は新たに専任教員(助教)が着任し、事務職員も交代して、心機一転、ジェンダー・女性学研究所の活動を始めました。

学内での主な活動としては、4月から5月にかけて新入生向けの施設見学があり、創造表現学部と文学部総合英語学科を中心に、新入生が来所しました。6月には昨年に引き続き、研究所主催の講演会「自分らしい身だしなみ」を開催しました。1月には「第16回ジェンダー・ダイバーシティ視点の卒業論文・制作報告会」を開催し、6名の発表がありました。また、「星が丘出張ジェンダー研」は6月と11月にグローバルラウンジをお借りして実施しました。来年度は新センターの周知も兼ねて、より星が丘キャンパスでのイベント開催に力を入れていきます。

本年度はマスメディアによる取材も受けました。7月6日には中日新聞などや東版にステレオリーム課のジェンダーレス制服プロジェクトを特集していただきました。9月11日には東海テレビ「NEWS ONE」にて研究所設置科目「ジェンダー・ダイ

バーシティ表現演習」の授業と公演の風景を中心に、研究所の取り組みが放送されました。11月発行の愛知淑徳大学後援会誌『楓信』でもステレオリーム課を取り上げていただき、保護者の皆様に当研究所を知っていただくことができました。

学外から研究所への訪問もありました。ステレオリーム課が対応した訪問(8ページに記載)以外では、2023年12月11日に岐阜県人権擁護委員大垣協議会不破委員会の皆様が研修のため来所し、助教より男女共同参画や女性活躍の現況について説明しました。

ジェンダー・女性学研究所から
ダイバーシティ共生センターへの改組のお知らせ

1994年に設置されて以来、約30年にわたって活動を続けてきたジェンダー・女性学研究所が、2024年度より「ダイバーシティ共生センター」へと改組されることになりました。研究所の伝統を受け継ぎながらも、障がいの有無や国籍の違いなど、

広くダイバーシティについての学修支援を行うとともに、学生同士が意見を交換できる「しゃべり場」や「ピア・カウンセリング」も設置予定です。学生だけでなく教職員の方もぜひ一度足を運んでみてください。

ジェンダー・女性学研究所第53号ニューズレター 目次

★学生企画(ステレオリムーブ課)

- ・ 特集「ジェンダーレス制服完成」…………… 2
- ・ 学内にあるジェンダー～島田学長インタビュー～ …… 3
- ・ ゆるりと巡るジェンダー研 第4回「お茶の水女子大学ジェンダー研究所」 …… 4～5
- ・ 妊娠・出産について考える座談会 …… 6
- ・ 職業を選ぶ …… 7
- 「違いを共に生きるための福祉と展望」河瀬 郁哉さん(福祉貢献学部2年)
- 「CAを目指す過程で得た挑戦と希望」浅井 祐里実さん(交流文化学部3年)
- ・ 2023年度のステレオリムーブ課の活動／Cinema／Book Discovery…………… 8

★教員エッセイ

- 「『ダイバーシティ』とサラダボウル」鈴木 崇夫 (初年次教育部門助教) …… 9
- 「選択と決断—多様な生き方を目指して」菅野 淑 (ビジネス学部助教) …… 10

★第42回定例セミナー／2023年度研究所の1年／

- ジェンダー・女性学研究所からダイバーシティ共生センターへの改組のお知らせ …… 11

施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒にでも大歓迎です!

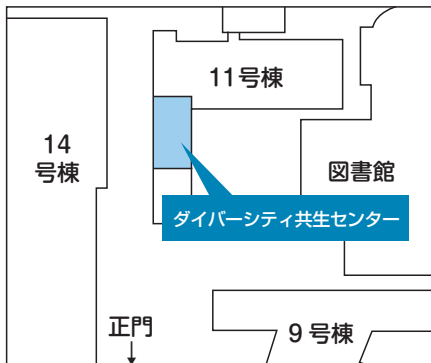
開室日 毎週月曜日～金曜日

開室時間 9:00～17:00

場 所 愛知淑徳大学長久手キャンパス11号棟1階(ダイバーシティ共生センター)

ペット型ロボット“プレオちゃん”います。

遊びにきてね!



新センター発足に伴い、11号棟1階に移転します。(4月中を予定)

ASU・IGWS2023年度

運営委員

坂田 陽子(所長兼) 外山 敦子 高原 美和 宮田 雅子 松島 佳子
大宮 摂子 江崎 那留穂 菅野 淑 福本 明子 反橋 一憲

学生運営委員ステレオリムーブ課

野村 花音 羽生 勇太 柴田 莉穂 後藤 優花 夕部 蓮太
桑江 愛瑠 石塚 江莉奈 石川 葵 安藤 彩友美 若島 仁登
佐村 有基

事務担当

杉浦 直代

編集後記

一昔前は「ダイバーシティ?? えっ、アメリカのどこかの街の名前?」と言われることもありましたが、今では「多様性の事だね」と返事が返ってくるように。すでに私たちの生活に多様性が根付きました…。と言いたいところですが、まだまだ根付いていないですね。どうしたら違いを相互に理解して調和して生きることができるでしょうか。新しく生まれ変わる「ダイバーシティ共生センター」で考えましょう。(所長 坂田 陽子)

発行年月日：2024年3月1日

〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9

Phone 0561-62-4111 ex. 2498

FAX 0561-63-9308

E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp (4月より disc@asu.aasa.ac.jp)

表紙デザインは佐村有基さん、石川葵さんに担当していただきました。